ベトナムの宗教政策

ードイモイ後の行政組織からー

平成 19 年度入学
参加したフィールドスクール：ベトナムフィールドスクール
調査地：ベトナム
北沢　直宏

自分の研究テーマについて

研究テーマは、ベトナムの新宗教カオダイ教を通し、教団－社会の関係性を考察することである。ベトナムの宗教事情は近年、その宗教の多様性と活動の活発化が指摘されることが多い。しかし末端の宗教実践に注目が集まるあまり、教団の組織構成や国家との関係性についての分析は少ないという特徴がある。

カオダイ教の寺院

カオダイ教は少数派ではあるが、密集して住んでおり信者同士の繋がりは強い。宗教に対する規制が厳しいベトナムにおいて、このような宗教団体がいかに組織を維持しようとしているのかに焦点を当てる。具体的には、教団外の社会への対応と教団内の信者への対応の双方を把握することにより、ベトナム社会における教団の位置付けを明らかにすることを目的としている。これは宗教と社会というテーマ性も帯びている為、ある程度の普遍性を持ち他地域との比較が可能と成り得ることから、単なる一地域の研究と終わらない点にも特色がある。

博士予備論文では国家による宗教管理体制の傾向を明らかにした。行政側が、次々に公認組織を認定し、教団組織を表に出すことで監視体制を確立しつつある点に言及した上で、この傾向が今後も続いていくと思われる事を指摘した。しかしながら教団側からの視点は抜け落ちており、これに関しては今後も考察を行っていく。

フィールドスクールから得られた知見について

ベトナムにおいて様々な職にある人々に接し直接話を聞く事が出来た事は、普段は機会が無いだけに有意義であった。しかしながらあまりに多種多様だった為、全体として薄く広い印象になってしまった感は否めない。また、わざわざフィールドでやるべき話題か否かについても疑問も残っており、日本で関係者の話を聞いたところで本質は別段変わり無いのではないかとも感じている。例え行うにしても、今回のようにフィールドワークとして少数民族の村に行くのであれば、それに向けた座学の在り方があったのではないかと思われる。万人受けするような人選・プログラムは、逆にフィールドスクールの意義を分かり辛いものとしたように思う。対象地域と専門分

野の兼ね合いは難しいと思われるが、そこ改善の余地があるように感じられた。個人的には、特定の分野に特化していった方が、例えそれが専門外の分野だったとしても有益に感じられたのではないかと感じている。

わざわざ海外で行った座学に関しては多少疑問が残るものの、フィールドスクールの醍醐味はやはりフィールドに出てからであろう。中でも一番印象的であったのは「道の駅」の存在であった。話として聞いた際には魅力的な試みとして映ったものの、実際に赴いてみればいかにも箱物といった感が否めず、反面教師として非常に記憶に残ると同時に、改めてフィールドに出る事の大切さを実感することとなった。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

自分の研究の対象国は開催地と同じベトナムであるが、赴いた少数民族の村は自分の調査対象とはかなり異なっており、同じ国内でありながらも文化の多様性を感じさせられるものであった。従って本フィールドスクールでは普段接することが無い地域・分野に触れることが出来、自分のベトナムに対する見識を深める事が可能となった点において有益であった。訪れた場所は全般的に交通アクセスが悪かった為、その感もひとしおである。

訪れた少数民族の村

博士論文でも博士予備論文と同様にベトナムの政教関係を扱っていくが、今後は組織と社会との関わり方により焦点を当てていくつもりである。今回のフィールドスクールにおいて垣間見る事が出来た行政側と村民の関係性には、自分の興味対象と似通った部分もあり興味深いものであった。環境は違えども、今回得た知見は今後研究を行っていく上で生きてくるものと思われる。

訪れた郡の人民委員会